

教会暦と聖書の流れ

イエスのエルサレムへの旅が続いています。この旅の段落の中に、ルカは他の福音書にないイエスの多くの言葉を伝えています。今日の箇所のとえ話もルカ福音書だけが伝えるものです。なお、お金や富の問題は先週の福音から続いているテーマだと言えます。

福音のヒント

(1) この箇所の少し前の14節には「金に執着するファリサイ派の人々」ということばがありました。ファリサイ派は当時のユダヤ教の一派で、律法と口伝律法(律法学者たちによる律法解釈)を厳格に守ろうとした宗教熱心なグループでした。彼らがなぜ、「金に執着する」と言われるのでしょうか。隣人を愛し、貧しい人のために自分の持っているものを分かち合うという律法に表された神の根本的な要求よりも、自分の生活の豊かさを確保した上で、安息日の義務や清めに関する細かい規定を熱心に守ろうとされていた態度のためなのでしょう。だとすれば、「金に執着する」という言葉は、わたしたちにとっても他人事ではないかもしれません。

(2) 19-21節で、この世での金持ちとラザロの生活が対比されます。当時嫌われていた動物だった犬が近づくということも、ラザロの状態の悲惨さを強調しています。22節以降には、死後の世界についての描写があります。「天使たちによって宴席にいるアブラハムのすぐそばに連れて行かれた」とか「陰府(よみ)でさいなまれ」とか「わたしたちとお前たちの間には大きな淵(ふち)があって」などです。ここにある死後の世界の具体的な描写は当時の人々の考えに基づいたものであり、イエスは死後の世界のありさまについて教えようとしていると考える必要はないでしょう。むしろここでイエスは、死という時・決定的な神の「裁き」という観点から見て、今をどう生きるかを鋭く問いかけているのです。

なお、このラザロという人は特別に正しい人であったとは言われていませんが、金持ちと貧しいラザロの状況は死後逆転してしまいます。このような神による逆転は、ルカ福音書の特徴といえるかもしれません(ルカ1章52-53節、6章20-26節参照)。その根底には、「神は真実な方で、貧しい人の苦しみを決して見過ごされることはない」という考えがあると言えるでしょう。

(3) 「お前の兄弟たちにはモーセと預言者がいる」(29節)、「モーセと預言者に耳を傾けないのなら、たとえ死者の中から生き返る者があっても、その言うことを聞き入れはしないだろう」(31節)と言われますが、それは、貧しい人を助けなければならない、という



ことについて、旧約聖書をとおしてすでにはっきりと聞いているはずだ、ということです。たとえば、申命記にはこういう箇所があります。

「あなたの神、主が与えられる土地で、どこかの町に貧しい同胞が一人でもいるならば、その貧しい同胞に対して心をかたくなにせず、手を閉ざすことなく、彼に手を大きく開いて、必要とするものを十分に貸し与えなさい。……彼に必ず与えなさい。また与えるとき、心に未練があってはならない。このことのために、あなたの神、主はあなたの手の働きすべてを祝福してくださる。この国から貧しい者がいなくなることはないであろう。それゆえ、わたしはあなたに命じる。この国に住む同胞のうち、生活に苦しむ貧しい者に手を大きく開きなさい」(申命記15章7-11節)。

イザヤ書にもこうあります。

「わたしの選ぶ断食とはこれではないか。悪による束縛を断ち、軛(くびき)の結び目をほどいて / 虐げられた人を解放し、軛をことごとく折ること。更に、飢えた人にあなたのパンを裂き与え / さまよう貧しい人を家に招き入れ / 裸の人に会えば衣を着せかけ / 同胞に助けを惜しまないこと。そうすれば、あなたの光は曙(あけぼの)のように射し出で / あなたの傷は速やかにいやされる。……飢えている人に心を配り / 苦しめられている人の願いを満たすなら / あなたの光は、闇の中に輝き出で / あなたを包む闇は、真昼のようになる」(イザヤ58章6-10節)。

(4) このようなことばを、この金持ちとその兄弟たちは聞いていたはずだ、ということです。この金持ちが聞き逃したのはそういう聖書のメッセージであり、見過ごしたのは目の前の人の苦しみでした。わたしたちにとっても呼びかけは2つあると言えるでしょう。1つは「聖書」からの呼びかけ、神が人間に何を望んでおられ、わたしたち人間は何をすべきか、ということです。もう1つは「現実」からの呼びかけです。自分の家の目の前に、貧しい人が横たわって苦しんでいる、そのような現実にはわたしたちに何かを呼びかけているはずで、聖書をとおしての神の呼びかけと、目の前の人間の現実の必要が結びついたときに、わたしたちの具体的な行動への呼びかけになるはずです。

わたしたちはそういう呼びかけを聞いているのでしょうか。それに応えているのでしょうか。どうしたらその呼びかけに本当に応えることができるのでしょうか。

(5) 「死者の中から生き返る者」(31節)という言葉は、イエスご自身を暗示しているのでしょうか。もちろんここでは、その者を見ても回心しないだろう、と言われるのですが、福音書の言葉を読む時に、イエスご自身の姿を思い浮かべることがいつも大きなヒントになります。イエスは単に言葉による教えを述べたのではなく、「主は豊かであったのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、主の貧しさによって、あなたがたが豊かになるためだった」(コリント8章9節。きょうのアレルヤ唱参照)と言われる方です。それは単なる「施し」をはるかに超える姿でした。さらにマタイ25章31-46節で、イエスが、飢え、のどが渇き、旅をしていて、裸であったり、病気であったり、牢にいたりにしたことは「わたしにしてくれたことだ」と言った言葉も思い出すならば、「イエスは死者の中から復活して、貧しい人・もっとも小さな兄弟の中にいる」と言ってもいいかもしれません。わたしたちは、その呼びかけを聞くことができるのでしょうか。